

418 岡村博士逝く

〔『法学新報』第26卷3（295）号 大正5年3月5日〕

○岡村博士逝く 法学博士岡村輝彦氏は数年前より肺気腫を患ひ弁護士の業を廃して悠悠閑居し静養を怠らざりしか旧臘より胃潰瘍を併発し病勢急に加はり青山宮本両博士の治療を受けしも効なく去月一日午後一時二十五分遂に長逝せらる享年六十有二、氏は遠州浜松なる旧井上藩士岡村義昌氏の長男にて安政二年十二月二十日を以て生れ明治の初年藩の貢進生として開成所に入り同九年文部省より英国に留学を命ぜられ十四年「パリストル」の学位を得て帰朝し帝国大学講師、司法省民事局、控訴

院判事、大審院判事、横浜地方裁判所長に歴補し在任中訴訟手續改正に付て顕著なる好成绩を現はし明治十八年同志と共に英吉利法律学校即ち今の中央大学を創立し教授に將た経営に多大の力を尽し以て今日の盛況を致さしめ二十四年法学博士の学位を受け二十五年官を辞して弁護士と為りしか二十七年英国ピーオー会社汽船「ラベンナ」号土佐沖にて我千島艦と衝突して千島沈没の事件起るや審判に於て屢々我國の敗訴と為りしを西郷海相に選拔せられて氏は英國に特派せられ其熱心なる努力に依り我勝訴と為るや氏の名声一時に高く四十三年東京弁護士会長と為りしも大正元年病を以て弁護士の業を廃す三年同志の懇請を容れ病を力めて中央大学長と為りしか翌年病の故を以て辞任せられたり平生学徳並ひ称せられたるか今や即ち斯人なし痛悼の至りに堪へず葬儀は四日午後二時途中行列を廢し青山斎場にて仏式を以て執行せらるる定刻遺骸を安置せる柩車は数台の馬車に乗れる親族故旧に送られて式場に著し其より導師駒込吉祥寺住職岩本宗国師は十数名の僧侶と共に読経し了て東京弁護士会長岸博士は左の弔辞を朗読せられ

大正五年二月一日前東京弁護士会長法学博士岡村輝彦君道山  
 二婦ラル嗚呼悲哉君ノ世ニ生ケルヤ六十有三年未タ頽齡ニ達  
 セス幽明忽チ相隔ツ曷ソ痛悼ニ勝ヘンヤ

君少壮笈ヲ負フテ遠ク英國ニ游ヒ業成リテ「バリスター」ノ  
 栄冠ヲ受ク其婦朝スルニ及ンテヤ大学ノ諸生ヲ誨ヘ司直ノ各  
 職ニ陞リ令名嘖嘖タリ其冠ヲ挂ケテ弁護士ト為ルヤ深高ノ才  
 学ヲ發揮シテ常ニ良好ノ成績ヲ挙ク就中千島艦事件ノ如キ我

カ国威ヲ保全スルヲ得タルハ実ニ君ノ努力ニ依ル後東京弁護士会ニ会長タリ中央大学ニ学長タリ精励業ヲ磨キ虚心衆ヲ容ル真ニ斯界ノ泰斗ニシテ紳士ノ典型ナリ某等常ニ高風ヲ欽仰ス吾弁護士ノ地位モ亦漸ク内外上下ノ重視スル所ト為ルニ至リタルハ蓋シ君ニ負フ所ノモノ少ナラサルナリ而シテ今ヤ其人亡シ嗚呼悲哉並ニ欽葬ニ当リ東京弁護士会員ヲ代表シ涙ヲ揮テ恭シク博士ノ靈ニ告ク尚クハ饗ケヨ

大正五年二月四日 東京弁護士会長 法学博士 岸 清一  
 次に中央大学長奥田博士は左の弔辞を

大正五年二月一日前中央大学長法学博士岡村輝彦君病ヲ以テ千駄ヶ谷ノ邸ニ卒ス嗚呼哀哉君天資高潔ニシテ徳望人ヲ感孚ス早歳英京ニ官遊シテ専ラ法学ヲ攻サメ研鑽多年、已ニ業ヲ卒ヘ帰朝ノ後、職ヲ司法省ニ奉シ東京大学講師ヲ兼ヌ尋テ横浜始審裁判所東京控訴院大審院等ニ歴任シ皆克ク其ノ職ニ称ヒ令聞一時二嘖嘖タリ後冠ヲ挂ケ野ニ下リテ弁護士ト為リ夫ノ千島艦事件起ルニ及ヒ政府君ヲ簡派シテ英國ニ至リ其ノ事ヲ弁理セシメタリ君乃チ高遠ノ識ヲ以テ淵深ノ学ヲ登杼シ弁論往復、能ク正理ヲ伸展シ以テ我權利ヲ全ウスルコトヲ得タリ是ニ於テ君ノ名声隆隆トシテ興リ世人目シテ法学界ノ山斗ト為セリ是ヨリ先キ本大学ノ創メテ其ノ基ヲ開クヤ君同志ト心力ヲ合セテ之レヲ經紀シ又講座ヲ分担シ諄諄講述シテ倦マズ学生其ノ指導ニ頼リテ業ヲ成セシ者、屈指スルニ暇アラス而シテ本大学ノ發展、亦実ニ其ノ間ニ繫レリ是ノ時ニ当リ君斯界ノ重鎮ヲ以テ公私多忙ノ裏ニアルモ始終心ヲ本大学ニ寄

セ其ノ創立二十五年期ニ於テ講堂ヲ増建シテ記念ノ意ヲ寓スルヤ君実ニ之レヲ董督シ銳意幹旋、遂ニ能ク其ノ工ヲ竣スヲ得タリ然レトモ積勞多年、君漸ク羸疾アリ大正ノ初公私ノ職ヲ辭シテ閑地ニ就キシモ同人ノ懇請スルニ順ヒ病ヲ力メテ本大學長ト為リ其ノ經營ニ任シ以テ今日アルヲ致セシモノ本大學ノ尤トモ君ニ感謝スル所ナリ本大學ハ君ノ速カニ其ノ健康ヲ恢復シテ尚ホ本大學ノ重キヲ為サンコトヲ期セシニ何ソ図ラン昊天弔セス遽カニ君ヲ奪ヒ本大學ヲシテ其ノ依ル所ヲ失ハシメントハ嗚呼哀哉徳人凋謝シテ典型ニ亡ヒ空シク黄泉ノ寂莫タルヲ痛ミテ唯幽明ノ路ヲ異ニスルヲ恨ム此ニ謹ミテ楮前ニ稽顙シテ哀ヲ君ノ靈ニ告ク嗚呼哀哉

大正五年二月四日 中央大學長 法学博士 奥田義人

学士会代表者元田肇氏は左の弔辭を

学士会ハ会員法学博士岡村輝彦君ノ遠逝ヲ哀悼シ恭シク茲ニ弔辭ヲ呈ス

大正五年二月四日

学士会

中央大學學員會理事花井博士は左の弔辭を

大正五年二月四日法学博士花井卓藏中央大學學員會同人ニ代リ恭シク殯藻ノ典ヲ具ヘ前中央大學長法学博士岡村輝彦先生ノ靈ニ告ク明鏡ハ碎ケヌ先生ハ在サス嗚呼悲哉先生ハ我法学界ニ在リテ精神的忠実ナル鏡ニテアリキ先生ハ法学ヲ修メテ法学ヲ貢獻シ克ク四十年ノ久シキヲ終始シタマフ法官トシテハ法官ノ鏡ニテアリキ教師トシテハ教師ノ鏡ニテアリキ狀師トシテハ狀師ノ鏡ニテアリキ先生ノ忠実ナル精神ハ映シテ此

鏡ニアリ妍ヲ見テハ喜ヒタマヒ嫌ヲ見テハ憂ヒタマフ而シテ先生ノ喜憂ハ直ニ國家ノ喜憂タリシナリ先生ノ法学ニ於ケル関ハルトコロ大ナリト云フヘシ明鏡ハ碎ケヌ先生ハ在サス法学界為メニ光ヲ失ハントス嗚呼悲哉某等不肖親シク先生ノ教ヲ受ク負フ所誠ニ大ニシテ酬ユルトコロ徒ニ小慙悔特ニ切ナルヲ覺フ先生庶幾クハ恕ルサセタマヘ先生ハ安政二年十二月二十日ヲ以テ生レ大正五年二月一日ヲ以テ卒セラルル年ヲ享クル六十又二嗚呼蒼天何無情仁者未必寿也計至ル某等悲痛哀悼多ク言フコト能ハス無言之言無心之心靈尚饗

大正五年二月四日

中央大學學員會理事長 法学博士 花井卓藏和南

日本弁護士會理事總代ト部喜太郎氏は左の弔辭を

法学博士岡村輝彦君逝ク 痛恨何ソ堪ヘン  
博士ハ我カ法学界ノ耆宿ニシテ学殖深遠性質温厚徳藻一世ニ秀テ真ニ長者ノ風アリ弁護士ノ職ニ在ルコト二十五年人格ヲ重シ部下ヲ愛撫シ夙ニ同僚ノ推服スル所トナル明治三十年日本弁護士協會ノ創立ニ与リ幹事トシテ尽瘁スルコト多年身ヲ以テ衝ニ当リ功績大ニ見ル可キモノアリ協會ノ隆盛今日アルニ至ルモノ一ニ博士精勵ノ資ナリ明治四十一年徳望ヲ負フテ東京弁護士會長ニ推サル洵ニ一代ノ儀表タリ此ノ人今ヤ即チ亡シ痛恨何ソ堪ヘン  
深く博士ノ長逝ヲ悼ミ茲ニ恭シク誄詞ヲ呈ス尚クハ饗ケヨ

大正五年二月四日

日本弁護士協會理事總代 ト部喜太郎

中央大学学生総代宮本信彦氏は左の弔辞を

維時大正五年二月一日中央大学前学長法学博士岡村輝彦先生  
長逝セラル恭ク惟ミルニ明治十八年七月我中央大学創立ノ挙  
アルヤ先生幹旋頗ル努メ身劇職ニ在リテ多年講師ノ任ニ膺リ  
陶冶誘掖至ラサルナク同僚之二服シ学生之ヲ慕フ又大正二年  
三月奥田学長入閣シテ其職ヲ辞セラルルヤ病軀ヲ提ケテ其任  
ヲ襲ヒ熱誠以テ指導セラレ重患ノ其身ニ在ルヲ忘ルルモノノ  
如ク生等為メニ感奮激励スルコト幾回ナルヲ知ラス今ヤ溘焉  
易質セラル幽明相隔リテ復タ警咳ニ接スルコト能ハス追懷再  
三恍トシテ温容ノ耳目ノ間ニ髣髴タルヲ覚ユ嗚呼悲哉茲ニ中  
央大学学生ヲ代表シ恭シク誄詞ヲ捧テ先生ノ靈ヲ祭ル尚クハ  
饗ケヨ

大正五年二月四日 中央大学学生総代 宮本信彦

帝国海事協合理事長有地男爵は左の弔辞を

本会海事裁定部委員法学博士岡村輝彦君ノ逝去ヲ哀悼シ茲ニ  
哀悼シ茲ニ弔詞ヲ呈ス

大正五年五月四日

帝国海事協合理事長 男爵 有地品之允

麹町区公民会は左の弔辞を

麹町区公民会ハ会員正六位法学博士岡村輝彦君ノ逝去ヲ哀悼  
シ恭シク弔辞ヲ呈ス

大正五年二月四日

社団法人麹町区公民会会長 伯爵 清棲家教

東京育成園は左の弔辞を

東京育成園ハ

法学博士岡村輝彦先生ノ遠逝ヲ哀悼シ茲ニ恭シク弔辞ヲ呈ス  
大正五年二月四日 財団法人 東京育成園

岡山同窓会は左の弔辞を

法学博士岡村輝彦先生溘焉トシテ逝矣我等先生ノ殊寵ヲ忝ウ  
セルモノ痛惜措ク所ヲ識ラス茲ニ謹ンテ哀悼ノ意ヲ表ス

大正五年二月四日

岡山同窓会

岡山同窓会

岡村同窓会は左の弔辞を  
大正五年二月四日門下総代石川毛登馬謹ミテ岡村先生在天ノ  
靈ニ告ク先生夙ニ後進ヲ提撕シ諄諄トシテ規誨倦マス雅化洋  
溢人其ノ典型ヲ奉セサルナシ我曹頑鈍ニシテ建樹スル所無シ  
ト雖昕夕矜式終始景仰憑頼スル所洵ニ鮮淺ニ非ス孰レカ料ラ  
ン昊天弔マス俄カニ先生ノ訃音ヲ伝フル有ラントハ嗚呼先生  
温厚ノ風丰再ヒ仰クヘカラス崇高ノ訓言復タ聴ヘカラス自今  
以往誰ニ頼リテ請益セン道風懿範寔ニ後昆ニ映発シテ泯滅セ  
サルモノアリト雖哲人已ニ萎シテ長ニ讚仰スル所ヲ喪フ哀哉  
緋ヲ執リテ長歎シ辞ヲ尽ス能ハス英靈冀クハ来格昭鑒セヨ

大正五年二月四日

岡村同窓会

各朗読せられ喪主將氏、未亡人、其他親族来会者の焼香ありた  
るか会葬者は朝野の諸名士を始め中央大学学生等五百余名にて  
非常の盛儀なりき因に故博士は中央大学創立以来の功労者にし  
て且学長の要職にありたるより同学にては是非校葬にせんとて  
岡村家に申込みたるも同家にては故人の遺志に反けはとて之を  
固辞せられたりと云ふ